



Title	視覚言語論とフォルマリズム批評
Author(s)	金, 相美
Citation	デザイン理論. 2007, 51, p. 92-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51151
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

視覚言語論とフォルマリズム批評

金 相美／大阪大学

1. はじめに

シカゴのインスティテュート・オブ・デザイン、通称ニュー・バウハウスの「光と色彩」部門の長として教鞭をとっていたギオルギー・ケペッシュ（1906-2001）が『視覚言語（Language of Vision）』を著したのは1944年のことである。視覚言語、すなわち自然言語と同様、見る行為においても一定のリテラシーが働くという考えは、近代的造形芸術の一般概念として以前から存在していたが、それに詳細な規定を加えたうえ、具体的な事例を示したのは、おそらくケペッシュの著書が初めてであろう。同書が視覚言語論の草分けとして重要な意味を持つことには変わりはない。しかし、視覚の「言語」と題しながらも視覚における言語性、つまり視覚言語とは何か、その構文論、意味論、語用論上の規則は何かという問題は殆ど明らかにしていない。本論の目的は、造形要素の特徴の抽出とその構文論的段階に留まったケペッシュの考えを、行動主義記号論者チャールズ・モリス（1901-1979）の考えとの比較を通して発展させ、可能な限りの補完を試みるところにある。

2. 視覚言語論について

言語とは、一般的にコミュニケーションのための記号体系であるといえる。様々な記号が一定の規則をもとに体系的に構成されることを言語の記号体系という。それならば、視覚の言語においても同様な説明が可能なのだろうか。コードを背後に予想する記号体系のみを対象とする言語学、あるいは記号学による定義では視覚言語を説明することは困難で

あるように思われる。

同じく、ケペッシュは、位置、方向、大きさ、形、明るさ、色彩、質感のような異なる視覚的性質の体験に起因する固有の矛盾によって私たちは画面から動きや空間を感じると説明する。しかし、それだけではシュルレアリスム絵画や具象絵画が説明できないことは自明である。ここでモリスの類似記号を考慮に入れることは助けになる。具象絵画や^{テーマ}標題音楽のような再現的芸術が示す事物の記号は、芸術家の独自のスタイルや属する流派に応じて文法的に結合される。例えば、ストラヴィンスキーの「春の祭典」が何を表しているか、つまり何を記号化しているかと問われると、人々は「動的なイメージである」という、ほぼ共通した答えをする。このように絵画の個々の線や音楽の単一の音が必ず記号である必要はない。単一の複合類似物としての絵画や音楽が類似記号として何かを意味する点においては、非類似記号と同様であるというのがモリスの主張である。

もう一つ注目すべきことは、モリスが絵画や音楽における個別の要素が必ず記号である必要はなく、単一の複合類似物として成立すると考えていることだ。視覚言語は、先に言語、記号、テキストにおけるそれぞれのレベルを定めただけ、検討されなければならないことを意味する。その種の思考はロシア・フォルマリズムに見ることができる。ロシア・フォルマリズムの提唱者の一人であるロマン・ヤコブソン（1896-1983）は、いくつかの論文のなかで、パースの三分類法とその定義をもとに自己の文化記号論を展開した。

磯谷孝氏の言葉を借りてまとめれば、離散性の芸術記号の場合は、分節記号の結合によって一つのテキストが形成される一方、非離散性の芸術記号の場合は、一つの記号が一つのテキストになる。例えば、文学、音楽の記号は離散的で、絵画、彫刻は非離散的である。つまり、文学は複数の記号からなる言語、あるいはそうした言語と言語が結合されて一つのテキストが形成されるが、絵画の画面は反復的単位の結合として分割することができないから、一つの記号＝一つの言語＝一つのテキストになる。モリスが芸術作品を単一の複合類似物として見なしたことは、以上のような芸術作品の持つ「離散性」と「非離散性」を踏まえれば説明可能になる。

3. おわりに

ケベッシュは『視覚言語』において見る行為における視覚的リテラシーの働きを説いた。それは視覚言語論の草分けとして、また具体的事例の提示として大きな意義を持つが、体系的な定義とは言いがたいものである。本論ではケベッシュの視覚言語論を踏まえながら、それを補完するものとしてモリスの記号論とヤコブソンのテキスト構成理論を取り上げてみた。

モリスの類似記号は、ケベッシュの説明では非常に曖昧にされている具象的芸術とその組織化に関する有効な補足に成りえると考えられる。要するに、再現的芸術が示す事物の記号は類似記号であり、それらは芸術家独自のものとして結合されるという定義と、ある種の芸術作品は必ず個別的記号の構成である必要はなく、単一の複合類似物として認められるということである。それを裏付けるものとして、ロシア・フォルマリズム批評に見られるテキスト構成理論を検討した。

モリスはケベッシュの『造形と科学の新し

い風景 (The New Landscape in art and science)』に序文を寄せるなど、二人が接点を持っていたことは容易に想像できる。また、一つの学問が隣接学問の助力を受けつつ成り立っていくことはそれほど珍しくもない。しかし、人的交流や学問間の関わりはさて置き、造形芸術におけるケベッシュの、記号論におけるモリスの、文学批評におけるヤコブソンの思考そのものが互いに補い合い、ある意味で同一な着地点を目指していたことは非常に興味深い。それは、科学への統合というべきものだったかもしれない。科学への統合という試みが造形芸術を論ずるケベッシュにとって有益なものだったのか、それとも限界に導いたものだったのか。この問題に関しては別の機会に論じたいと思う。

有史以来、芸術を取り巻く議論は途絶えることなく行われてきた。さらに、その困難さは大いに認められ、観念的傾向がますます強くなってきたように思われる。日常生活はもちろんのこと、芸術における創造や受容に欠かせないにも関わらず、視覚やそのメカニズムに関する理論形成はかなり遅れを取っている。ケベッシュ、モリス、ヤコブソンが口を揃えて視覚記号における理論形成を訴えたのは、おそらくそのためであろう。彼らの研究活動における絶頂期から既に半世紀近くが過ぎており、それ以来多くの研究がなされてきたことも事実である。しかし、次々と現れる新しいメディアの普及は、芸術行為に限らず、人間行為全てにおける表現と認識、そしてコミュニケーションに関する新しい次元を作り出している。それゆえ、視覚的リテラシーの働きの解明は、さらにその重要性を増しているのではないだろうか。